

会議名	令和7年度	開催日	令和8年2月27日(金)
	第2回台東区立図書館に関する意見交換会	時間	午後6時30分～8時00分
		場所	生涯学習センター501コンピューター研修室
出席者	大串夏身委員長(昭和女子大学名誉教授) 野末俊比古副委員長(青山学院大学教授) 田島大輔委員(公募区民) 松尾敦委員(台東区立松葉小学校校長) 山藤弘子委員(台東区社会教育委員) 吉本由紀委員(台東区教育委員会生涯学習推進担当部長)		
配布資料	事前配布資料 【資料1】図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議資料 当日配付資料 【資料2】「今後の図書館について」意見 【資料3】図書館意見交換会へのコメント 【資料4】図書館意見交換会へのコメント		
内容	1. 開会 配布資料の確認 2. 挨拶 大串夏身委員長 3. 議事 今後の図書館について ○「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議資料について」事務局から説明 【事務局】 これまで来館していなかった人に対する利用促進の方策について、ご意見を伺いたい。 また、本日ご欠席の委員よりご意見を伺っているため、資料4をご覧いただきたい。 【委員長】 ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。 まず、事前にご意見をいただいた委員からお願いしたい。 【委員】 最初に、来館していなかった方に対する利用促進というところを2つに分けて書いている。 1つ目が「忙しくて時間がない」という方々。 時間がない、理由がない、生活導線に図書館がないという方々には、まず来館しなくても使えるということが重要で、すでにオンライン登録は開始されている。 プラス電子図書館はまだまだ少ないが、それとうまく組み合わせることで最初の1冊をその場で借りてもらうという経験をしてもらうのもいいと思う。 また、本は物理的なものなので、駅であったり区の施設であったり、生活導線の中で受け取れると便利で、返却も含めてできたらいいと思う。 さらに、図書館に来てもらうという動機づけで、何かしらのイベントをオンラインでも短時間でも開催し、こういうこともあるんだというところで見えていただいたり、物理的な本棚もターゲットを絞り、テーマ別にした固定的なものがあるといいと思う。 他には、SNSも発信してると思うが、もう少し積極的に行い、知ってもらうというところ。 2点目は、利用経験が薄い、来ることに心的ハードルがある方、外国人・使い方がわからない、そういう方々に対してのサポートというところで、初めて来た方に向けたミニツアーや、「30秒でわかる図書館」と書いたが、紙1枚・		

WEB1ページなどで、中身がわかるようなシンプルなものを作成すると思う。
他には、本当にわかりやすい説明で、多言語も標準化し、日本で学習している方に向けた情報の提供、母語の本を見える化するなど、同じように情報発信をしていくと思う。

【委員長】

非常にいいご意見が示されてると思う。
図書館では細かくあれこれとどうしても説明が長くなるが、「30秒でわかる図書館」のような紙1枚でわかりやすくというのはとてもいいと思った。
他に何かあればお願いしたい。

【委員】

お話をいただいた多言語のことについて、そのとおりだと思う。
利用促進のための1つのアプローチとして、ソフト面で人権・多様性推進課が行っている日本語教室や、外国語のサークルが3つある。
そういったところに司書の方に来てもらい、図書館の利用カードの作成、使い方をやさしい日本語で案内してもらったり、多言語の読み聞かせを引き続きできないかと思っている。
外国人親子だけでなく、外国ルーツの若者がとても多いので、そういった方を活かした、日本人や外国人向けの多言語情報発信をできたらいいと思う。
やさしい日本語や、台東区の外国人の半分である中国語、その他ベトナム語といった層にあてたものがないかと思う。

もう1つは、外国人のルーツの子供が多い平成小学校には、家庭科室や図書室にピクトグラムが貼ってある。
子供・外国人・障害のある方など、直接的に場所がわかるサインを徹底するとわかりやすくなると思う。
最後に、やさしい日本語の研修を職員の方と一緒にできるといいと思う。
図書館職員が全てを行うことは大変なので、実際に外国人住民を呼んで、図書館の機能などを伝えることを一緒に行うなど、地域住民を巻き込んでいただき、利用に繋がれたらと思う。

【委員長】

図書館に勤めていたときに、日本語を学んでいる外国の方々をツアーのように案内した。
都立図書館では中国語の資料をかなり購入し本棚に並べ、それを見て勉強もした。
もう1つは少数言語で、職員のカリキュラムでも、英語のあとは少数言語を選んで学ぶというシステムだった。
実際に来ていただくことは大変なので、こちらから出向くということも必要。
また、図書館員が基本的な会話の勉強をすとか、そういったことも必要。
図書館に来られる方が減って、コロナ禍以前に回復していないということはどこの図書館も悩みだと思う。
5分のミニツアーもいい。
国会図書館などもこういった取り組みをしていると思う。
参加された方の了解を取って、動画をホームページでアップすると、誰でも見ることができいいと思う。

続いて「地域との連携・協働の推進について」事務局から説明をお願いしたい。

【事務局】

○「地域との連携・協働の推進について」事務局から説明

【委員長】

ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。
まず、事前にご意見をいただいた委員からお願いしたい。

【委員】

地域連携というよりは、その設備をどう使うかというところになるが、すでに行っている講座やイベントなどの連携を軸にし、学びプラス図書館という、ワンストップ化のようなものがないのではないか。
現在、生涯学習センター内で行われている講座の受付など、図書館とは別々になっていると思うが、そういったものを共同で受け付けたり、そういった導線でのウェブページなどのサービスもいいし、その講座を受けた方が、関連する資料を当日すぐに受け取れるとか、その導線上にゆっくりできる場所を設け、そこでディスカッションするなど、講座に来た方に図書館も活用していただくように誘導していくのがいいのではないか。

【委員長】

「学びのラウンジ」なんていいと思う。

講座にはお互い顔見知りでもなく来るので、何も喋らず帰るとするのは非常に残念で、お互いが交流できるような時間を講座の中で作ったり、こういった短時間でも語り合えるような場所があって、それが人と人の繋がりを産んでいくことになる、とてもいいと思う。

【委員】

台東区のお子さんが調べ学習でも、素晴らしい成果を出されているという話を聞いていて、町に職人がいる、本物に出会えるというのが、台東区の強みかと思った。

前回も話をしたが、ぜひ中高生のスタディールームのような場所で、地域の資源を大人から子供まで使い、その学びも地域課題を解決するようなテーマで、それを大人や大学生がサポートし、またそこで発表するような機会ができるといいと思う。

もう1つは、地域が高齢化し、町会活動も担い手がどんどん不足しているが、行政で作った地図とは違う神社やお寺の氏子やそういった方たちの区分けで、地図上には見えない人の繋がりが残っているのが台東区なので、社会教育と一緒にやれるのであれば、町内会の歴史をアーカイブ化するワークショップのようなものもいいかと思った。

他には、防災や福祉などはいつも地域課題なので、それに合わせた特別展示や、区民に直結的な課題をテーマにした展示や資料リストなど、町会でやる防災もバージョンアップできるようなテーマであれば、地域の人も利用しやすくなるのではないかと思う。

最後に、11月以降、生涯学習センター4階の半分が多文化共生スペースになるが、せっかく同じ建物なので、本だけではなく地域住民と外国人が対話し、「なぜ台東区に住んでいるのか」「どういう歴史で生きてきたのか」など、外国人住民が話し、それをヒューマンライブラリーという形で本に見立てて話を聞くイベントを実施し、その国に関する本を展示コーナーに置くなどする、いいと思った。

【委員長】

非常に具体的な提案をしていただいた。

確かに、町や地域については、小学校4年の教科書で一年かけて、防災や福祉などいろいろなテーマで学ぶことになっている。

また、確か5年生で地形図を使い、タブレットのデジタル地図と組み合わせ、地域のことを調べるといったものがあったと思う。

そして中学生になると、地域の課題を自分たちで調べて見つけ出し、その課題の解決策を提案し発表する。

そういった子供たちが学んでいる具体的なことをわかりやすく書いた本はいろいろ出ているので、それを図書館で集め展示するなどする、いい。

文部科学省が総合的な学習の時間の手引書を作っているが、そこには、地域の課題に取り組み、それを地域の方みんながサポートし、発表会を図書館などで開いたほうがいいと書いてある。

地域の方に来て見ていただくと、地域の方々の関心を高めるということで非常に有効であると書いてある。

これはぜひ、学校と協力しながら図書館にもやって欲しいと個人的には思った。

【委員】

図書館を利用して欲しい年齢層或いは人の中には児童という層が分厚いウエイトを占めると思う。

そうすると図書館ばかりに頑張っていたくのではなく、学校も共同体だと思うので、もう少し授業で活用していく必要があると思っている。

少しずれた話になるかもしれないが、担任時代は、保護者にも子供にも、将来的に自分が必要だと思う情報を図書資料から探すことができるような人材に育てていきたいと伝えていた。

その手始めとして学校図書館を中心にその中にある本から探していこうと。

そういう意味では今、台東区では電子図書館も入って、本の母数はとても増えてると思う。

今言った情報というのは、主に総合的な学習の時間や社会科などで調べる場合が多いので、内容としても科学だったり人文科学だったり、民族的なものが中心になると思うが、子供にはプロセスとしては、書架のどこを探すといいのか、背表紙でどんなタイトルだといいのか、手に取って表紙を見て、次に目次を見て目星をつける、これだなと思うものがあったら本文を読んで確かめていこうとなる。

こういったことを何度も何度も繰り返し、自分が必要な情報を集める力を磨いていくということ、そうやって読んだ内容から必要な内容を取り出す力、引用する力、まとめる力という経験を積ませる。

それを必要な場面で様々な教科領域で活用してきた。
今はAIなどもあるので、これまで以上に本に向き合うような子供に育てていくという工夫が必要だと思った。

【委員】

社会教育センターなどを委託している事業者と話す機会があったが、学びの最初は図書館のほうがハードルが低く、図書館の利用者にどのようにして、次のステップとして講座に参加していただくか。学習に関しては個別化が進んでおり、講座に参加をした隣の方と話すことによって最終的に地域のことを知ってもらい、地域活動に繋がり、より学びに繋げていけたらいいと話をしたところだった。生涯学習センターには、中央図書館もあり、いろいろな講座の案内や学習相談にもものっているもので、そういったところで引っ張っていけるような、誰でも受け入れていますよ、ふらっと立ち寄ってくださいますよ、そういった図書館づくりができればいいと思っている。本日、たくさん良い意見をいただいているので、参考にさせていただきたいと思った。

【委員長】

私の意見・感想はレポートで書いているので後で読んでいただきたい。
行政の調査部にいた頃、ヨーロッパの子供の福祉のことをいろいろ調べたが、1970年代後半で、すでに情報化社会の中で活躍できる人材をどのように育てたらいいかというのが、当時のヨーロッパの教育界の非常に大きなテーマだった。
そこで、0歳児からの読書というものを始めている。
字がわかるかわからないかではなく、静止画を子供たちに見せながら語りかけることが、人間形成・人間の基礎をつくる上で非常に大きな効果があり、なおかつ、家庭の中だけでなく、地域の中の図書館に来てもらい、図書館員や地域の人が子供に語りかけるということが非常にいい。
それは人間のコミュニケーションを作るといふことと、それぞれの地域の中の感情や独特の方言を含む言葉だとか、そういうものを子供たちが自分の中で受け取るということも非常に効果が高い。
なおかつ、子供たちが来たときに楽しい空間で、本というものは楽しいものだと感じてもらおうと、それが人間が成長していく上で、繰り返しよみがえってくる。
日本の読書アンケートでも、小さなときに楽しい読書の経験をした子は、大人になってからも読書に向かう或いは本を読む割合が高いという結果もある。
私が図書館に勤めていたときには、図書館のサービスは、字が読める子供からというふうに習った。
ところが北欧はそうではなく、0歳児の読書の出発点のところから図書館が中心になってサービスを行い、それも図書館員だけではなく、学校の先生、医者、心理学者など、医学的・心理学的な知見も含め、子供の読書を考えようというふうになっていた。
日本は、乳幼児が来たときにお世話をできる空間を持つる図書館の数が少ない。
その辺も含め、これから皆さんに考えていただきたい。

続いて「職員の意識改革や人材活用について」事務局からご説明をお願いしたい。

【事務局】

○「職員の意識改革や人材活用について」事務局から説明

【委員長】

ただ今の事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。
まず、事前にご意見をいただいた委員からお願いしたい。

【委員】

今回、あり方が変わるということなので、図書館のミッションなども見直す必要があると思う。
今、台東区の図書館はミッションがないか、もしくは新しく中央図書ができたときに何かあるのかもしれないが、学びと情報アクセスを支えるという形に変えるのであれば、KPIなども変わってくるのではないかなと思う。
それによって評価していく必要はあるかと思う。
ミッションがあれば行動指針などもあると思うので、例えば「断らない図書館」のような形であれば、何か困っているときに、誰かがきちんとサポートしていくとか、先ほどから話が出てくるような、外国人、高齢者、障害者の方々 came ときに、特別ということではなく対応するのは当たり前というような形で進めるというのでもいいのではないかなと思う。
また、人材活用のところも、図書館の役割として、それぞれ担当やグループを作って、図書館司書の方だけではなく

く、外部の人材というところもサポートをいただくような形で連携していくといいのではないかと思います。

【委員長】

特に外部の人材ということで、図書館によっては子供・生徒たちが来ていろいろ説明したあと、さらに詳しく知りたいときには、リストアップした人を紹介し、対応をお願いしているところもある。

それも、地域だけに限るといふところと、地域外にも広げているところがある。

外部の方に、図書館を理解し協力していただけるといい。

【副委員長】

全部に跨ることが多いので、まとめて話したいと思っている。

1つ目が、特に利用の促進や、連携の推進のところになるが、ニーズの分析が大事だと思う。

忙しくて時間がない層や利用経験が薄いなど、そういうニーズがわかっていると対応に当てられるので、とにかくニーズを分析する。

あまり来てない人、来る回数が少ない人に聞くということになるので難しいが。

我々の共同研究で全国の人に、アンケートを取ったことがある。

図書館に来ない人も含めてだが。半分以上の人は図書館にも来ないし本を読まない。

そういう方たちが本を探すときに何で困るかということ、難易度がよくわからないとか、分量がよくわからないというところで困っている。

例えば図書館で、これは中学生ぐらいの学力で読める本とか、1日で読める本とかということがわかるような仕組みを作ると、もしかすると利用は増えるかもしれない。

ニーズを調べるというのはそういうことだと思う。

逆に図書館をたくさん使う人は、自分の求めている本がうまく探せない、キーワードがよくわからない、そういうところで困る。

それに対してはカウンターにどんどん来てもらうなど、いろいろなやり方があると思う。

来たいけど来られない人、来たらいいのに来ない人、困っていることがあったら図書館に来てくれればいいのにと
いう人たちには、何かしらの形で1回体験してもらうしかないと思う。

統計的にやる必要は必ずしもないので、こういう人がいるというケースを把握するだけでもいいと思う。

それに関連してなのだが、数ではない評価軸は持ったほうがいいと思う。

図書館に来て困ったことが解決したとか、本を読んで気持ちが豊かになってよかったとか、何でもいいので、そういう成果のようなものを評価できるように、量だけではなく質も大事にすべきだと思う。

その前提はもちろん1回体験しているということ。

体験しても使わない人は使わないので、必要なときに使いに来ればいいと思う。

鳥取県立図書館はビジネス支援に力を入れているが、その成功事例を展示している。

例えば、「文献を読んで、昔のお饅頭を再現してお店で売った」や「図書館でいろいろ調べて新しいシャッターを開発した」など。

それを見ると、こういうことが図書館でできるということがわかる。

この例はたまたまビジネス支援だが、子育てでも、教養の読書でも、他の人が図書館をどう使ってどんな成果を出したのかがわかるということは、評価としても大事かと思う。

先ほどの図書館を使って調べるコンクールの作品などでもいい。

2つ目が、協働になるのか、人材の活用になるのかわからないが、図書館で全部をやるにはニーズが多様化していて難しいので、他の委員の意見にもあったが、いろいろな人たちの力を借りていくことが必要である。というよりも、図書館をうまく使って自分たちがやりたいことをやってください、というようなスタンスぐらいでいいのだと思う。

例えば、最近では那須塩原市の「みるる」は、年間150回以上イベントをやっている。

何のためにやっているかということ、要するにイベントをきっかけに図書館に1回足を運んでもらい資料などを知ってもらう。

自分たちだけで考えたら150回はとても無理だが、持ち込み企画も多くそれが強みになっている。

イベントだけでなく、例えば棚づくりなどでも、外部の方が図書館をこんなふうにしたらいいのではないか、こんなふうに使いたい、こんなことをやりたいということをどんどんやってくれればよいということ。

その時のお相手として、区としてやろうとしていることはたくさんあると思うので、福祉でも、健康でも、教育でも、図書館はそこ手をつなぐべきだと思う。

石川県立図書館がそういうスタンスをとっている。

自分たちで企画を1から考えるのではなく、行政として、県としてやらなければいけないことがあるのだから、そういった事について図書館でできることを一緒にやっていくと、向こうからもいろいろな持ち込みが来て、リソースや人材も来るので、そういうふうにしていくといいのではないかと思う。

3つ目が、複合施設の話なのか何になるのか、図書館でないとできないことに注力するべきだと思っている。単なるイベントや展示であれば、別に図書館でやらなくてもいい。

図書館だからできることをやるべきで、それには資料と図書館の職員。

例えば複合施設だと、調理コーナーがあると近くに料理の本、工作室があると工作の本、子育て支援スペースがあると子育ての本や絵本を持っていくという、活動ベースでいろいろな配置を変える分散配置という考え方が一部で積極的に取り入れられている。

ただ、台東区の場合、そこまでは難しいと思うので、蔵書管理の問題はあるが、館内ではない場所に資料を配置してみるというのも1つの手だと思う。

ICタグがついていれば盗難防止ができるので、例えば、館内ではなくても、この建物の必要なところに資料の特設コーナーを作って、そこに図書館の職員が一時出張で相談を受け付けるなど、そういう手もあるかなと思う。

複合施設と言っても、たまたま一緒にいるだけのように感じるところが全国に非常に多くもったいない。

それに関連して、札幌市の図書・情報館や、石川県などでも一部やっているが、利用者の方が困っているであろう、知りたいであろうことをあらかじめ予想して、そのコレクションの棚を作ってしまう。

例えば、ビジネスでプレゼンテーションをうまくやるにはどうすればよいか、あがらずにやるにはどうすればよいか、蔵書など、来そうな相談に必要な本を並べるといった棚の作り方を考える。

全部でやる必要はないと思う。

イベントでも季節のものを捉えるのもいいが、レファレンスサービスで相談に来そうなものをあらかじめ先取りしてやっていくような特集棚の作り方があっていいかと思う。

あまり図書館や本に関心がない人を引き寄せるために、最近横浜市がAIを使った蔵書の探索システムをやり始めた。

キーワードで探すということはとても大変で、知らない分野のキーワードというものは思いつかない。

例えば、異常気象だといっても「異常気象」「気候変動」ぐらいしか思いつかない。

もっといいキーワードを思いつきたいが、まだ学んでいないことだからわからない。

そういうときにAIに助けをもらえるので、それはすごく意味がある。

これは図書館にあまり来ない人に受ける。

うまく探し慣れてない人にとっては非常に意味があるということがわかり、横浜市がやり始めたことは、例えば、子育て支援ポータルサイトに書かれているサービスのところで子育て支援に関連する本を紹介する。

それを人間がやるには手間がかかってしまうので、AIが探し関連する本を紹介すると、そこからこんな本もあるのかと、図書館に来る人がいる。

つまり、そういう接点を探し作っていく。

図書館に来て来てと言っても来ないので、少し種を蒔いておくと、それがきっかけで来るような場所が、特に行政の分野にはたくさんあると思うので、そういうやり方もあるのではないかと思った。

【委員】

特集棚と、企画を持ち込めるというところにとっても感銘を受けた。

実際に特集棚を区民に任せるといったことが今後できるのか。

また、持ち込める企画、こういうことをやりたいといったときに、それを実際に持ち込んでやらせてもらえるのか、事務局がどのように考えているか伺いたい。

本を読むことだけでなく、企画を持ち込んだりして関わられるということで、来館に繋がることはあると思う。

【事務局】

例えば、特集棚という話がでたが、今年度は中学生向けにボランティア講座をやったが、いずれはその子たちが棚を作ったり、計画中のアクティブラーニングルームを利用する子供たちが棚をつくったりというような、ボランティア活動ができればいいという話は職員の中でしている。

もちろん地域との連携も強化していかなくてはならないという認識があるので、どういった方式ができるのかはわからないが、検討していきたいと思う。

【委員】

地域の人を入れると管理が大変ということはあると思うが、全部を図書館で行うのは大変だと思うので、任せられるところは任せ、地域の人たちが入っていけるような余白というか、実際に生涯学習でやっている講座とこちらの資源をデザインしたりなど、区民のグループを作るといいのではないかなと思う。

【委員長】

23区は区によって特色があるが、住民の方が図書館に企画持ち込んだり、ボランティア活動などいろいろとやっているのは、伝統的に墨田区である。

それぞれの地域の実情を踏まえながら図書館がやろうとすれば、できないことはない。

伊丹市は入口にオープンスペースを作り、図書館が中心になって、住民を集め話し合いをして、その中で決まったことを提案した人がやるというシステムになっている。

鳥取の新しい図書館の運営方針のようなものを作ったときには、今、住民がどういうことで悩み、どういう要求を持ってるかをまず図書館が把握して、それに合わせて図書館が何をできるかという形で県民に示さなければ、図書館はいつまでたっても資料提供をするだけの浮世離れたものになるからやめようと言った。

鳥取の場合とはとにかく子育てのことに関心がある。

子供たちが県外に出て行って地元に戻るのはごくわずかしかない。

なので、外に出た子供に地元のことを忘れないで欲しいということは県民の願いで、地域にいかに愛着のある子供たちを育てるかということをまず図書館が考えなければいけない。

2番目は、自分たちの地域を良くするには産業だとか仕事を作らなければいけない。

これにはビジネス支援で、一生懸命図書館として取り組んでいる。

札幌では、貸し出しをしない図書館を作ったが、利用者が来るだろうかという心配があったが、結構な人が来ている。

本の魅力を住民の方にわかってもらうためには、図書館員が地域に出ていき、専門家や地域の人のお話を聞くということから始めないとだめだと。

そういった中で、今、地域住民がどういうことを一番求めているかということを理解し感じて、地域の人にもいろいろと提案してもらい、それを図書館が表現するというので、先ほどのテーマ展示のような棚づくりをしてる。

住民の求めているものを、「来たらこういう本があるな」とわかるように、そして手に取っていただけるような棚づくりをすれば、繰り返し来てもらえる。

図書館は雲の上の話ではなく、住民の方々の気持ちを汲み取って棚づくりやサービスをする、そういうふうにしていけば図書館は変わっていく。

ぜひこれからもご協力いただきたい。

以上で議事を終了とする。

5. 閉会